

通 信



日 仏 東 洋 学 会

2001年3月

東京・京都

第24・25号

日仏東洋学会

- 会長： 興膳 宏
- 名誉会長： DE NAVACELLE, M.C. ・ DELORMAS, Jérôme
- 顧問： 秋山光和・江上波夫・福井文雅・市古貞次・彌永昌吉
- 評議員： 竺沙雅章・DURT, Hubert・濱田正美・羽田 正・池田 温・石沢良昭・
石井米雄・彌永信美・狩野直禎・加藤純章・菊池章太・興膳 宏・
桑山正進・京戸慈光・前田繁樹・松原秀一・御牧克己・森 由利亜・
森安孝夫・明神 洋・中谷英明・岡本さえ・大谷暢順・齋藤希史・
坂出祥伸・高田時雄・田中文雅・坪井善明・八木 徹・山田利明
- 代表幹事： 中谷英明
- 幹事： 濱田正美・石沢良昭・前田繁樹・御牧克己・明神 洋・中谷英明・
齋藤希史・高田時雄・八木 徹
- 監事： 加藤純章・岡本さえ
- 会計監事： 森 由利亜
- 推薦委員会： 福井文雅・池田 温・加藤純章・興膳 宏 御牧克己

本部・事務局

〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518
神戸学院大学人文学部 中谷英明研究室

入会・会費（3000円）

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学部 森 由利亜

『通信』編集担当

中谷英明・齋藤希史

表紙 題字 元・趙孟頫の六体千字文から
高田時雄氏集字
カット イラン陶器模様（13世紀）から
桑山正進氏描画

日仏東洋学会会則

- 第1条 本会を日仏東洋学会と称する。
- 第2条 本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に、交流と親睦を図るものとする。
- 第3条 本会の目的を實現するため次のような方法をとる。
(1) 講演会の開催
(2) 日仏学者の共同の研究及びその結果の発表
(3) 両国間の学者の交流の促進
(4) 仏人学者の来日の機会などに親睦のための集会を開催する
(5) 日仏協力計画遂行のために学術研究グループを組織する
- 第4条 本会の本部は日仏会館におき、事務局は代表幹事の所屬する機関内におく。
- 第5条 本会会員は本会の目的に賛同し、別に定める会費をおさめるものとする。会員は正会員および賛助会員とする。
- 第6条 正会員および賛助会員の会費額は総会で決定される。
- 第7条 本会は評議員会によって運営され、評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は2年とするが、再任を妨げない。
- 第8条 評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。これらの役員の任期は2年とするが、再任を妨げない。
会長 1名 代表幹事 1名 幹事 若干名 会計幹事 1名
監事 2名
日仏会館フランス学長は、本会の名誉会長に推薦される。会員総会はその他にも若干名の名誉会長・顧問を推薦することができる。
- 第9条 会長は会を代表し、総会の議長となる。代表幹事は幹事と共に会長を補佐して会の事務を司る。会計幹事は会の財政を運営する。監事は会の会計を監査する。
- 第10条 年に一回総会を開く。総会では評議員会の報告を聞き、会の重要問題を審議する。会員は委任状又は通信によって決議に参加することができる。
- 第11条 本会の会計年度は3月1日より2月末日までとする。
- 第12条 この会則は総会の決議により変更することができる。
- 第13条 以上の1条から12条までの規定は、1989年4月1日から発効するものとする。

STATUT DE LA SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES

- Art.1 Il est formé une association qui prend le nom de Société franco-japonaise des Etudes Orientales.
- Art.2 L'objet de la Société est de promouvoir les échanges scientifiques et amicaux entre spécialistes français et japonais des Etudes Orientales.
- Art.3 Les moyens employés pour réaliser l'objet de la Société sont entre autres les suivants:
1 - Organisation de conférences,
2 - Etudes et recherches entreprises en commun par des scientifiques français et japonais et publication de leurs résultats,
3 - Développement des échanges de scientifiques entre les deux pays,
4 - Organisation de réunions amicales entre scientifiques français et japonais, notamment à l'occasion des visites des scientifiques français au Japon,
5 - Organisation de groupes de travail spécialisés, pour la poursuite de projets coopératifs franco-japonais.
- Art.4 Le siège de la Société est établi dans la Maison franco-japonaise et le bureau à l'établissement auquel appartient le secrétaire général.
- Art.5 Sont membres de la Société toutes personnes qui approuvent le but de la Société et acquittent la cotisation. La Société comprend des membres ordinaires et des donateurs.
- Art.6 La cotisation pour des membres ordinaires et des membres donateurs est décidée par l'Assemblée Générale.
- Art.7 La Société est administrée par le Conseil d'Administration. Les membres du Conseil d'Administration sont élus par l'Assemblée Générale des membres. Ils sont élus pour deux ans et sont rééligibles.
- Art.8 Le Conseil d'Administration élit dans son sein:
- 1 Président - 1 Secrétaire Général
- Plusieurs secrétaires - 1 Trésorier - 2 Auditours.
Les administrateurs ci-dessus sont élus pour deux ans et sont rééligibles. Le Directeur français à la Maison franco-japonaise est statutairement président d'honneur. En outre, l'Assemblée Générale peut élit un ou plusieurs présidents d'honneur et plusieurs conseillers d'honneur.
- Art.9 Le président représente la Société et préside l'Assemblée Générale. Le secrétaire général assiste le Président pour assurer avec les secrétaires les activités de la Société. Le trésorier gère les finances de la Société. Les auditeurs surveillent la comptabilité.
- Art.10 L'Assemblée Générale se réunit une fois par an pour entendre le compte-rendu du Conseil d'Administration et délibérer sur les problèmes importants. Les membres de la Société peuvent voter par procuration ou par correspondance.
- Art.11 L'année fiscale de la Société commence le premier mars et prend fin le dernier jour du mois de février.
- Art.12 Les statuts peuvent être modifiés par décision de l'Assemblée Générale.
- Art.13 Les dispositions statutaires prévues dans les articles 1 à 12 ci-dessus entreront en vigueur le premier avril 1989.

目次

福建省の出版に見る東西文化交流……………	岡本さえ……………	1
「チベット牧象図」再考……………	御牧克己……………	10
Dix ans de développement des études sur la littérature chinoise en France (II)……………	François Martin……………	18
新しい価値観の確立と古典学研究所の設置について……………	中谷英明……………	26
2000-2001年度 コレージュ・ド・フランス、高等研究院講義題目抜萃……………		31
会計報告……………		37
2000年度会員名簿……………		41
編集後記……………		48

福建省の出版に見る東西文化交流

岡本さえ

昨年の5月に筆者はフランス社会科学高等研究院 (EHESS) で、3回のお話をし、ラスパイユ大通りにある近現代中国センター (CECMC) でのセミナーでは、次のような題目で報告した。

第1回：18世紀中国における検閲
(*La censure en Chine au XVIIIe siècle*)

第2回：近世中国における知識人の比較思考
(*Conceptions comparatives chez les intellectuels dans la Chine prémoderne*)

第3回：福建省における中国とヨーロッパの対話
(*Un dialogue sino-européen dans la province du Fujian*)

見晴らしの良い教室で行われた集まりには、中国研究を中心とするアジア研究者が参加された。毎回違った専門分野の参加者があり、イエズス会士デュアルドについて博士論文を提出したキリスト教布教史の研究者や、日本の映像史を研究中だという台湾留学生の参加もあった。何年も逢わなかった幾人

かの研究者の顔も見られた。

第1回目には雍正帝時代 (1723-1735) の思想統制について話した。清代の禁書で名高いのは18世紀末の乾隆禁書であるが、1説に10万冊といわれる膨大な禁書の殆どは16・17世紀のものである。禁燬の最も激しかった18世紀に、禁書の刊行がなかったのは何故だろうか。その最大の理由が雍正帝の政策にあり、文人や出版者の自粛により禁書になりそうな本が、出なくなったことを話した。

第2回目には明代の開かれた比較思想を、『明史』外国伝、『拯世略説』等の資料によって話した。他方、清朝の異文化関心は国防等の緊急事には高まったが、満州王朝の関心は内治であった。1776年にパリで発行された『中国の歴史、学問、芸術等に関するメモワール』には諸科学の沈滞が書かれているが、この観察には当時仏蔵相に招かれた2人の中国青年のインタビューが取り入れられているようにも見える。列席者の間で議論が湧き、筆者には大

きな刺激となった。この初めの1, 2回の発表内容については、帰国後に自著で詳しく述べたのでここで繰り返さない(1)。

第3回目は、EHESSのカルテイエ教授のセミナーを兼ねた時間であった。筆者は、東西文化の対話の例として17世紀前半の漢籍『三山論学記』(2)『口鐸日抄』(3)を取りあげ、次のような内容を話した。『三山論学記』は1627年にイタリア人宣教師アレーニ(Giulio Aleni、艾儒略、1582-1649)と、大臣経験者である福建出身の葉向高(文忠、1567-1630)及び都御史の要職を経た曹于汴(1558-1634)が、懇談した記録である。中国高官の対話であったためか多数の版本があり、よく知られている。また『口鐸日抄』は1630年から1640年まで11年間にわたり同じアレーニを中心に、ルドミナ(Andre Rudomina、廬安德)、クンハ(Simon-Xavier da Cunha、瞿西禱)、マトス(Benoit de Mattos、林本篤)等のイエズス会士が、100名以上もの福建地方在住の文人と交した自由会話の記録である。

『三山論学記』のアレーニは、創造者と主宰者という天主の概念を理解してもらおうとして、儒学の「理気」や「太極」、「天地」はみな靈明知覚をもち、万有が無い時代の造物主ではなかったとして批判する。曹于汴が評価する仏の教えに対しても、アレーニは摩耶夫人の生んだ釈迦もまた、創造者たる天主によってのみ存在するのだと主張する。

それに対して葉向高は、現実社会の自然災害から善人すらも救わない場合がある天主の、「全能」に疑問を投げかける。中国文人にとって大切なのは死後の天国よりも、現世社会での幸福であった。天主の能力に対するこのような疑問は、『三山論学記』よりも数年後(1631年8月29日)に行われたアレーニと福建文人の会話でも繰り返され、『口鐸日抄』巻2に記録されている。風雨露雷は天主の司るものであるのに、天候不順で五穀が育たない時があるのは何故かと言う質問に対して、アレーニは多くの人間が天主の命を犯しているからだと答える。しかし、と福建の

文人（林一鶴）はいう。天候不順が悪人を罰すると言うのなら当然です。でもその中に善人がいるのは、どうしてですか、と。

多数の文人が登場するこの『口鐸日抄』の特徴は、話題がまったく自由なことである。文人たちはローマと福建の時差、福建沿岸の海寇の人間性、台風等の自然災害、死後の生命、天主教が禁ずる中国の一夫多妻の習慣、風水思想、天体観測等についてアレーニたちと意見を交わす。中国の五行とヨーロッパの四元説の違いも話題に上る。

中国の伝統では気の作用に、天人相感や精神作用をも含めるのに対して、アレーニは気という漢字をあくまで空気 (aura)、物質 (materia) という意味に用いる。イエズス会がこうした基本的な概念の東西の違いをそのままにして、中国における気をめぐる行事を批判したことは、17世紀後半の清代になって楊光先事件等のトラブルを生む1因にもなるが、明代の『口鐸日抄』に登場する文人たちはアレーニの話に耳を傾け、おおらかに貴国では、我が国

では、と談笑している。

但しアレーニが中国の城隍神を偶像として批判したとき、彼らは城隍神が我が町を守ってくれると反論する。匿名の大臣がこの議論に加わり、城隍廟は古代から中国人の人物に敬意を表して造られた歴史上の人物に敬意を表して造るべきでない、と反論するとアレーニはこう言った。大部分の神々は歴史人物の名前を取ったものですが、人々はその像を造り祭祀を捧げています。それに人々はそれらの像が、人の幸不幸を決める不思議な力をもつと信じています。そうした信仰は、もはや歴史人物への敬意を逸脱して偶像崇拜の誤りに陥っています、とアレーニは指摘する (4)。

大学院生が多数を占めていたこの日のセミナーで、皆の関心が集まり且つ筆者にとっての難問であったのは、何故このような日常会話の珍しい記録が福建省に残されたのか、ということであった。カルテイエ教授も中国文献紹介誌RBS (5) の中で、『口鐸日抄』に関する筆者の過去の論文を取り上げて、

同書の特異性を特記していると言って、RBS事務局のエリセエフ=ポワル夫人はその箇所をコピーして下さった。

帰国直後の筆者は、勤務先の研究所に報告書の原稿を提出することが決まっていた(6)。報告書でもこの『三山論学記』『口鐸日抄』は、思想伝播の資料として各々1つの章を占める筈であった。筆者は文人の西学観を検討し『明朝破邪集』(1639年序刊本)という漢籍を取り上げた際に、この本がアレニを含むヨーロッパ人宣教師を追放せよ、西の夷狄がもたらした天主教や暦法は誤っている、と主張する攘夷論集であること、しかも『三山論学記』『口鐸日抄』と対立する立場の『明朝破邪集』(7)が、同じ明朝末期に福建省で出版された事実を確認し、強い印象を新たにした。しかし筆者はこの時まで、パリで出された質問と結び付けて考えるまでに至らなかったため、報告書では福建省における出版文化の特異性には触れられなかった。そこで今

『口鐸日抄』と同時期に、『明朝破邪集』が刊行された1630-1640年代の福建省を、出版環境という視点から振り返ってみたい。

まず『口鐸日抄』とは相反する立場を取る『明朝破邪集』は、16世紀末にイエズス会士マッテオ・リッチ(利瑪竇、1552-1610)等が入華し中国文人と交流を始めて以来、反天主教・反西学の立場に立った文人の作品を集めた本である。『明朝破邪集』の執筆者は福建人とは限らないが、長江以南各省の出身者が多い。職業も官吏、在郷文人、軍人、仏僧等さまざまである。例えば、福建省行政の最高責任者であった福建巡撫や福建巡海道は、西夷の教えが古代からの中国の人倫・道德観を覆し、伝統行事や社会秩序を否定するものだと断じて、夷狄の教えを禁止しようとした。軍人や地方官も東南アジアや台湾・マカオを侵略しているヨーロッパ人の禍が、中国に及ぶことを警告した。また仏教徒は天主だけが「無始無終」という天主教に反発し、天地や鬼神や虚空も本来無始無終であると

主張した。仏教を支持する在郷文人は、天主教徒が他の偶像を崇めることを禁じて観音や菩薩の像を破壊し、動物は人間と違って靈魂を持たないからと言って平気で殺傷するような非道を行う、と激しく非難した。

もっともこの『明朝破邪集』の中にも天主教を禁じた地方高官に対して、真っ向から抗議してイエズス会士を弁護する若い文人たちの姿が書かれている。警察長官にあたる巡海道の施邦曜は、1637年12月に次のように記した。

「生員黄大成、郭邦曜が怒りおさまらず、まっすぐ本官のもとに来て夷人を擁護し、口を極めて世間の追遠祭祀を虚文と為し、天主だけが真実だという。且つ本官を偏屈で情に疎い者だとする。こうした有り様は、あたかも天下あまねく夷狄の教え（ここでは天主教を指す）に入らなければ止まないかのようだ」（8）。施邦曜は2人の生員を提学道（視学官）に連絡して処罰させよと命令しているが、文人に体刑が及ぶことはなかった。

他方『口鐸日抄』にも、アレー二に

共鳴した文人が天主教に入信しようとして家族に止められた話や、宣教師の望遠鏡の性能についてある文人が友人に語っても、信用されなかった実例が記されている。1632年7月7日（崇禎5年5月20日）の記事にあるアレー二と林太学の会話は次のようなものだった。「話が偶然、西国の奇器に及んだ。（林）太学が言った。昔、桃源（江蘇省）で（先生に）お目に掛かった折に、貴国の望遠鏡を見せて頂きました。帰宅してそのことを言いましたが、信じる人がありませんでした。先生が言った。あなたの町は桃源からどのくらい離れていますか。太学は言う。わずかに1舎（30里）です。先生が言った。（信じないのなら）1舎でもはるかに遠いと言えるのです。君のような丁重な人が実際に見たことを親友に話しても、なお疑われるのですよ。ましてや私たちは泰西から航海して行程9万里、3年を経て東へ来た者です。伝古千来、（泰西など）見たことも聞いたこともないのに、どうして人がにわか信じたり、従ったりできるでしょうか」（9）。

このように双方の書物の作者たちは、自分と反対の意見をもつ人々が存在することを十分に認識している。明末の福建にはそれほど出版が自由に行われ、官憲の規制も無かったのであろうか。

『三山論学記』に先だって1623年に刊行された『職方外紀』(10)は、世界地理の参考書として中国文人に大きな影響を与えた。本書完成時の著者名はアレーニであった。この書物に序文を与えた文人の殆どが、中国南部出身である。徐光啓と共に天文学や軍事学に造詣の深かった李之藻(-1630)は、こう記している。「今年の夏、わたしの友人楊仲堅(楊廷筠)は、西士の艾子(アレーニ)と(万国図を)増補編集した。およそ(中華の)付近の職方・朝貢のある諸国に関しては、みな記載しなかった。記録したのは、もともと絶遠で中国と交通がなかった地であり、だから職方外紀と名付けたのである。これらの記録はみな大変珍しく喜び驚くべきことばかりであり、人が聞いたこともないことを聞かせるのである」

(11)。

アレーニと共に『三山論学記』の共著者となる葉向高は、この『職方外紀』序にこう記す。「泰西氏(利瑪竇、リッチ)が始めて中国に入国すると、その説では天地万物みなこれを造るものがあり、これを尊んで天主といった。敬し事えるのが天の上のことなので、人はたいへん珍しがった。そうして天主を言うと、吾が儒の畏天の説と類似しているので、その(天主の)教えを信奉する者がすこぶる多かった。輿地を言うと、吾が儒にもまた地は卵黄のようだとする説があるが、泰西氏が図に記したようにその道理、名前、風俗、物産を極めることはできない」(12)。

葉向高によるとアレーニの見聞には、有名な張騫(-B.C.114)や鄭和(1371-1434?)も遠く及ばない。「今、泰西の艾君(アレーニ)がまた『職方外紀』を作ったが、みな吾が中国が前代未聞の所で、想像もつかない所である。(中略)しかもその言はみな明確な証拠があり、道家の諸天や、釈氏の恒河・須弥山のように茫洋としたいい加減なも

のではなく、永劫に（吾が中国の）人が行かないことを窮めている」（13）。このように『職方外紀』という一書に何人もの文人が序跋を寄せている。

福建での出版活動に限って考えても、『口鐸日抄』以外にも息の長い活躍が続いていた在野の、親天主教グループがあったことが分かる。とりわけ葉向高に協力して『三山論学記』を校閲し、『口鐸日抄』でもしばしば登場した張賡は、他にも『聖教信証』『則聖十編』『万物真原』『天釈明弁』等の親天主教パンフレットを出版した福建グループの中心人物である。天主教によって行動を導く正しい理と、良心に従う善を実現できるとした張賡は、文人・士人と呼ばれる中国社会の支配層の、儒学の教養と対立することもなかった。

1619年（万曆47）に福建省の泉州南に出土した唐代と思われる十字架の古石は、張賡が刑部の大臣を務めた所蔵者蘇茂相(1567-1630)から委託されて、1638年（崇禎11）に古石聖架碑式を行い教堂に奉納したという。この蘇茂相は『三山論学記』にも序文に寄せた福

建出身の文人で、諸葛亮（孔明、181-234）を引き合いに出してアレーニを称えた人である。

「諸葛武侯は書を読めばその大意を把握するのみで、細かい字句の詮索などは放っておいた。艾子（アレーニ）は次のように論じている。天主を尊崇し、その教戒を遵守するように。吾が身が何から生じ、吾が性は何によって賦与され、今日は何の服務をなし、他日は何に帰復するかを勘案するように。人の子が父母につかえるように、ほんとうに適時に励み目ざすように、と。以上のことは（詰まるところは）“起敬起孝”であり、これこそが論学の大意である。余が何千何百の言葉を費やしても、以上に述べた数語によってこれをおおうことができよう。」（14）

以上の引用に見るように、明末の文人は教養としての西学を高く評価し、アレーニ等宣教師の学識を尊び、遠国の外国人を迎えている。しかもこの文人たちは官僚としての地位も高かった。とりわけアレーニ等を識る高官が、在野の西学支持・親天主教グループとも

交流していた福建では、これらのヨーロッパ宣教師もまた活動しやすかったであろう。そのためかアレーニは半生を福建省で過ごし、漢文で30種もの著作を刊行した。

『明朝破邪集』に結集した攘夷派の人々の焦りは大きかった。親天主教・親西学の文人たちは、中国社会の中では中央に知られた官僚であったから、たとえアレーニを妖夷と呼んで国外追放しようとしても、背後にいる文人たちに圧力を加えることはできなかった。万暦三僧の1人株宏(1535-1615)は、『明朝破邪集』にも収録された「天説」の中で言う。「今日、天主教を信奉している人々はみな正人君子で、一世に目立ち、衆人が手本として動向を決す

るほどである。だから私は相手の聞きづらさもかまわず、ひたすら忠告せずにはいられないのである。どうかあなたは、草かりや木こりの言葉にも比すべき私の忠告を取り上げて、賢察していただきたい」(後藤基巳氏の訳による)(15)。

『明史』外国伝によると、中華帝国が夷狄に対して海禁か緩和かという対立は、貿易や倭寇対策、時には暦法等の学問をめぐっても繰り返されている。特に海に面した福建では、こうした議論が古来盛んであったように見える。福建の出版に見られる諸問題は、異文化交流の多方面を衝いているので、これからも考え続けたい。

注

- (1) 岡本さえ『近世中国の比較思想』東京大学出版会、2000、596p.
- (2) 『三山論学記』1巻、1847年重刊本。(東洋文庫蔵) パリ国立図書館のクランコレクションには17世紀の原本が、少なくとも4種類確認される。
- (3) 『口鐸日抄』8巻、1872年上海慈母堂重刊、(上智大学キリシタン文庫所蔵)。同上のパリ図書館には、17世紀の原版が多数所蔵されている。
- (4) 城隍神はしばしば話題になるが、例えば『口鐸日抄』巻8、1b-6a参照。

- (5) *Revue Bibliographique de Sinologie*. 社会科学高等研究院発行の年刊誌。
- (6) 本稿注(1)参照。
- (7) 『明朝破邪集』8巻、安政2年(1855)水戸弘道館刊本。
- (8) 同書巻2、33b-34a。
- (9) 『口鐸日抄』巻3、19ab。
- (10) 『職方外紀』5巻首1巻、守山閣叢書史部所収。本書も多様な版本があり、特に序文の収録に差異がある。
- (11) 『職方外紀校釈』(1996、中華書局)収録の『職方外紀』李之藻序。
- (12) 及び(13) 『職方外紀』(葉向高)序。
- (14) 『三山論学記』蘇茂相序。
- (15) 『明朝破邪集』巻7、@宏「天説1」、2a。後藤訳は@宏撰『竹窓隨筆』に収められた天説から採録。

「チベット牧象図」再考¹

御牧克己

0. はじめに

チベット仏教修行の一端を視覚的に表現した「チベット牧象図」は、禅の「十牛図」または「牧牛図」との類似性などによって、これまでしばしば注目されてきた。「牧象図」という表現は「牧牛図」という表現のアナロジーによって命名されているもので、チベット語自体では<「止」の図> (Zi gnas dpe ris) と呼ばれるものである。

「止」とは「観」と並ぶ仏教の代表的な瞑想の方法であり、「心一境性」と呼ばれる、心を一点に集中することを意味する。一方、「観」とはその心の集中の上に立って「人法の二無我」を観察し、「空」の達見を得る瞑想方法である。最終的には「止」と「観」はどちらか一方だけを実践したのでは不十分であり、両者をバランスをとって修めること（「止観双運」）が強調されるのではあるが、インドやチベットの瞑想法においては、「止」と「観」との二つのプロセスは厳密に区別されており、先ず「止」によって心を一点に集中した上で、「観」の瞑想に入るといった形が定着している。禅の「十牛図」がどちらかといえばその両者を合わせたような修行階梯を表わしているといえるのに対して、「チベット牧

象図」は「九段階の心の安定」（九種心住）と呼ばれる「止」の階梯のみを具体的に表わしている。同図が<「止」の図>と呼ばれる所以である。「チベット牧象図」の内容解説は従来幾人かの研究者によっても試みられ、筆者自身も試みたことがある²が、不明な点をかなり残したままになっていた。今回「チベット牧象図」の類似図を出来るだけあつめて細部を比較し、また、夫々の跋文を読解、対照、吟味する機会があり、これまで不明であった諸点を全て解決することが出来たと思われるので、ここに報告しておきたい。

1. 禅の十牛図³

本稿は、禅の十牛図を主題にしたものではないが、「チベット牧象図」とかなりの類似点を示す点で無視できないため、参考までに特に著名な廓庵（12世紀）の十牛図と普明（年代不詳、廓庵より少し前）の牧牛図とを掲載しておきたい。日本、特に臨済禅では十牛図といえは専ら廓庵のものを指し、一方、中国ではむしろ普明のものの方が有名ようである。十牛図に於て、牛は心または覚りの境地を表わしており、廓庵の図は、第八段階の一円相で表わされた覚りの境地からまた再びもとの、柳は緑花は紅の世界へと戻って来て、最後に全ての執着を離れたまま再び世俗的な市井の世界に混じって人々を救済する、という点に特徴がある。一方、普明の図は、最初汚れ



無礙第六



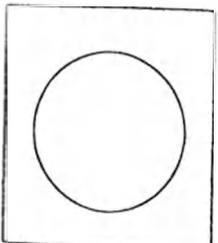
任運第七



相忘第八



攝照第九



雙泯第十



未牧第一



初圖第二



受制第三



迴首第四



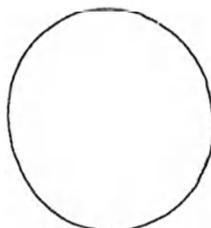
馴伏第五



(六) 騎牛掃冢



(七) 忘牛存人



(八) 人牛俱忘



(九) 返本還源



(十) 入麀垂手



(一) 尋牛



(二) 見跡



(三) 見牛



(四) 得牛



(五) 牧牛

普明の十牛圖

那庵の十牛圖

に染まった真っ黒な牛が、最後には真っ白な覚りの状態に至る、という修行の階梯を表わして「チベット牧象図」とよく似ており、特に牛が頭を廻らせている第四段階の「廻首」は「チベット牧象図」の第三心住並びに第四心住との極端な類似性を示している点で重要である。十牛図は各段階が独立した一枚一枚の絵になっているが、牧象図は、チベットのタンカの通例通り、階梯全体が一枚の絵に収められており、絵画のコンセプトが中国とチベットでは全く異なる点、大変興味深い。

2. チベット牧象図—内容解説—

右下に僧院の建物が見えるが、これがこの瞑想の舞台である。僧院の前に一人の僧形の人物が何かを追いかける格好で描かれている。これがこの瞑想の主役のヨーガ行者である。彼は右手には鉤を、左手には綱を持ち象を調教しようと追いかけている。象は心を象徴し、象の黒色は心の落ち込みを表している。象を調教するための鉤は正知を、綱は憶念（記憶）を表している。象の前を猿が走っているが、猿は心の散乱を象徴し、猿の黒色は昂ぶり（掉挙）を表している。

図中道がうねりくねって上方へ向かっているが、除々に瞑想のレベルが上がっていくことを示している。瞑想のレベルは九種の心の安定（九種心住）と呼ばれる九段階からなり、図中には①～⑨の数字で示した

九人の人に対応している。象の黒色は瞑想のレベルの進展と共に除かれてゆき、最後には全身白色となっている。図中の説明によれば、道の曲がり角は六あり夫々六種の力に対応している、とのことであるが、実際には道の曲がり角(khugpa)は五しかなく、出発点を一と考え、最初の曲がり角を二と数えるようである。或いは、khug pa とは曲がり角から曲がり角までを指し、最初の曲がり角までを一、第二の曲がり角までを二というように数えるのかも知れない。六種の力とは〔1〕聴聞力、〔2〕思惟力、〔3〕憶念力、〔4〕正知力、〔5〕精進力、〔6〕串習力（蓄積されてきた完成の最終段階の力）の六であり、図中には〔1〕～〔6〕の番号で示してある。第一の聴聞力〔1〕によって①の「心を安定させる」(sems 'jog pa, cittam sthāpayati) と呼ばれる第一段階の心の安定（第一心住内住）が得られるのである。

最初の曲がり角の直前に火炎が見えるが、これは心を制御するための憶念と正知の努力の力を生じることを表している。この火炎は第七段階の心の安定に至るまであらわれ、その大きさによってその努力の力の大小が示されている。つまり、低いレベルでは修行をするのに多大の努力を必要とするから火炎は大きく、レベルが上がるにつれて火炎は小さくなっている。第七段階以降は火炎はなくなり、努力せずとも自然に瞑想段階が進行することが理解されるが、

「止」の最後の瞑想段階である第九段階を過ぎてさらに少し行った図の右上の端に再び火炎があらわれるのはここで強い憶念と正知によって「観」が行われるからである。

最初の曲がり角に於いて[2]の思惟力によって「心を連続的に安定させる」(sems rgyun du 'jog pa, cittam samsthāpayati) と呼ばれる②の第二段階の心の安定(第二心住:等住)が得られる。これ以後第二の曲がり角に至るまでに、象と猿の頭の一部が白くなり始めているが、これは心が徐々に明瞭さと安定度を増していくことを示している。

二番目の曲がり角に於いて[3]の憶念力が得られ、それによって「心を引き戻して安定させる」(sems glan te 'jog pa, cittam avasthāpayati) と呼ばれる③の第三段階の心の安定(第三心住:安住)と「心を[対象]に近接して安定させる」(sems ñe bar 'jog pa, cittam upasthāpayati) と呼ばれる④の第四段階の心の安定(第四心住:近住)が順次成就される。第三心住のヨーガ行者の前を行く象や猿は頭部全体が白くなってきている上に、ここでは象の背中に兎が乗っている。兎は心の落ち込みの微細なものを象徴している。この段階よりヨーガ行者は心の落ち込みの大まかなものと微細なものとを個々夫々に認知出来るようになる。またこの段階では憶念の綱によってヨーガ行者が象をとらえていることが明瞭に示されている。動物達が後ろを振り返っているのは、ヨー

ガ行者が心の散乱を認知して心を再び瞑想の対象へ引き戻すことを示している。普明の十牛図の第四「廻首」との類似性が問題とされる箇所である。第四心住に於いては動物達は半分程白くなり、象は依然として綱でとらえられたまま後を振り返っている。

三番目の曲がり角に於いて [4] の正知力が得られ、それによって「心を制御する」(sems dul bar byed pa, cittam damayati) と呼ばれる⑤の第五段階の心の安定(第五心住:調順)と「心を静める」(sems zi bar byed pa, cittam samayati) と呼ばれる⑥の第六段階の心の安定(第六心住:寂静)とが順次成就される。第五心住に於いては心の散乱を示す猿はもはや心の象に先行することなく後に従っており、これまで猿と共にヨーガ行者に先行していた象や兎も行者の後に随うようになる。つまり、心が制御されているのである。第五心住ではヨーガ行者は正知によって心が散乱しないようにし、心を励まして三昧へと導くのである。左端の木の上に猿が居て果物を手にしているのは、一般に善行を行って果報を得ることを表しているが、この「止」の瞑想の道の外に描かれているのは、善行は一般に行うべきなのであるが、「止」の瞑想を成就しようとしている時には善行を行おうとして心が散乱し「止」の瞑想の妨げになるから「止」の瞑想中はそれを控えて「止」の瞑想に専念すべきであることを示している。つまり、

「止」の瞑想中以外では善行を行って自らを利益（自利）し他人をも利益する（利他）という二つの行の果報を得ることを示しているのである。第六心住では心を寂靜に保つが、ここではもう兔（心の微細な落ち込み）は消滅し、象（心）や猿（心の散乱）も半分以上白くなっている。

四番目の曲がり角では [5] の精進力が得られ、それによって「心を極めてよく静める」(mam par zi bar byed pa, cittam vyupaśamayati) と呼ばれる⑦の第七段階の心の安定（第七心住:最極寂靜）と「心を一点に集中する」(rtse gcig tu byed pa / cittam ekotikaroti) と呼ばれる⑧の第八段階の心の安定（第八心住:專注一趣）が順次成就される。第七心住に於いては心の落ち込みや昂ぶりは微細なものですら生じ難くなり、たとえ少し生じたとしても、たちどころにごく僅かの努力で除かれるようになる。囟中猿は全身まっ白になり、まったくおとなしく従順になって、これ以上ついて来なくなる。象も最後にはまっ白になり、猿と別れる。ここでは最初にごく少し憶念と正知を用いるならば、心の落ち込みや昂ぶりや散乱によって妨げられることなく、途切れることのない三昧に入り、このようにして第八心住が成就される。第七心住以降のヨーガ行者はもはや憶念の綱も正知の鉤も持っておらず、それらを用いずとも瞑想が進展することが示されているのである。

第三心住の後を振り返っている動物達の下あたりに描かれている絵は布を表わし触覚の対象を示している。第四心住の後を振り返っている動物達の下あたりに描かれている二つの大きな桃は味覚の対象を表わしている。第五心住のヨーガ行者の下に描かれている絵は香水の詰まった貝を表わし、嗅覚の対象を示している。第六心住の猿の下あたりに描かれている二つの四重丸のようなものは実はシンバルであり、聴覚の対象を表わしている。第八心住の真っ白になった象の下あたりに描かれている鏡は視覚の対象を示している。つまり、欲望の対象として色声香味触という五感官の対象が描かれており、それらを瞑想中に順次克服することが描かれているのである。

五番目の曲がり角では蓄積されてきた完成の最終段階の力である [6] の串習力が得られ、それによって「心を平等に安定させる」(sems mñam par 'jog pa / cittam samādhātī) と呼ばれる⑨の第九段階の心の安定（第九心住:等持）が成就される。心の象は全くおとなしく寝転がってヨーガ行者に随っている。

以上の九段階の心を安定させる修行（九種心住）によって、ヨーガ行者は心の落ち込みが全く除かれて、心の軽やかさ（心軽安）と身体の軽やかさ（身軽安）とを得て、「止」の修行は完成されるに至る。心の軽やかさを得た状態が次の象の上にヨーガ行

者が座っている図によって示され、身体の軽やかさを得た状態が空中を飛行する人物によって示されている。

最後に道が二つに分れているが、これは「止」の完成に続いて人法の二無我つまり空性を観ずる「観」の修行に入るのであるが、その際に、「止」と「観」とをバランスを取って平行しておこなう必要のあること（止観双運）を示している。「観」によって空性の達見を得るべく探求するためには強い憶念と正知が必要なので再び火炎があらわれていることは上述した通りである。

二つに分かれた道を最後のヨーガ行者が戻って来ているように見えるが、これは実は戻って来ているのではなく、「止観双運」の道を継続していることを示しているのである。ヨーガ行者の胸元から広がっている布のように見えるものは実はこの「止観双運」道であり、ヨーガ行者はその道を歩み続けているのである。また、そのヨーガ行者が右手に持っているものは、煩惱障と所知障という二つの障害を断ち切る般若の般若の利剣である。

3. 十牛図と牧象図

上述のように、禪の十牛図（特に普明のもの）と「チベット牧象図」はよく似ている部分が多いが、相互の間に影響関係があるかどうかは簡単には結論出来ない。年代的には廓庵や普明が12世紀頃の人物であるのに対し「チベット牧象図」はより後代

のものである。「チベット牧象図」には（1）紙の上に刷られているもの、（2）タンカ形式のもの、（3）壁画、という三種類のものがあることが確認されているが、紙の上に刷られたものは今世紀のものであり、タンカ形式のものもせいぜい19世紀くらいまで遡れるに過ぎない。壁画形式のものはラダックやチベットのいくつかの寺院に見られ、やや古いものと思われるが、この種の壁画を保持する寺院は14世紀に成立するゲルク派の系統の寺院に限られており、また、跋文はツォンカバ（Tson kha pa, 1357-1419）の『菩提道次第大論』（Lam rim chen mo）の「止」の章に忠実に拠って書かれていることは明瞭であるので、早くて15世紀のものであり、12世紀というような古いものではとうていない。従って、物理的な点からは、十牛図が牧象図に先だって成立していることは疑う余地はない。しかし、内容的には「チベット牧象図」の跋文中には、『声聞地』（Śrāvaka bhūmi）以来の九種心住を主題としている点、また、心を象に例えることで著名な清弁（Bhāvaviveka, 500-570年頃）の『中観心論』（Madhyamakahṛdaya）第三章第16偈が引用されている点、など仏教の伝統的な古い要素を含んでいる。従って、単に近代のものだと片付けることも適当ではない。ただ、もし両者の間に影響関係があったとすれば、絵画的な面で十牛図（特に普明のもの）が

「チベット牧象図」に影響を与えたという
ことは可能であろう。逆を考えることは出
来ないと思われる。

1 本稿は 1999年3月29日鳥取大学教育学部に於て開催された日仏東洋学会に於て「インド・中国・チベット仏教の瞑想の階梯—禪の十牛図とチベットの牧象図—」と題して行った講演の一部である。会場の設営等について鳥取大学の門田真智子先生に大変お世話になった。記して謝意を表したい。尚、文献学的な考証を含むより詳細な報告書は別に刊行の予定（京都大学文学研究科、2000年3月）がある。

2 従来「チベット牧象図」の内容を解明しようと試みた研究には以下のものがある。

(1) 梶山雄一(1958),「牧牛図の西藏版に就て」、『仏教史学』7-3, pp. 190-195.

(2) Catherine Despeux (1981), *Le chemin de l'éveil, illustré par le dressage du buffle dans le bouddhisme Chan, le dressage du cheval dans le Taoïsme, le dressage de l'éléphant dans le bouddhisme tibétain*, Paris, L'Asiatheque, pp.105-110.

(3) 小谷信千代、ツルティムケサン(1991),『仏教瑜伽行思想の研究』、京都、文栄堂、pp.117-124,(13)-(18).

(4) 御牧克己他(1996),『ツォンカバ』(大乘仏典[中国・日本篇]15)、東京、中央公論社、pp. 328-341.

3 禪の十牛図を主題にした書物は多いが、特に重要なもののみ掲げるならば次の如くである。

(1) 柴山全慶(1941),『十牛図』、東京、弘文堂。

(2) 梶谷宗忍・柳田聖山・辻村公一(1974),『信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀』、禪の語録16、東京、築摩書房。

(3) 柴山全慶(解説)・直原玉青(画)(1975),『禪の牧牛図』、大阪、創元社。

(4) 上田閑照・柳田聖山(1982),『十牛図 自己の現象学』、東京、築摩書房。

「十牛図」には外国語訳もいくつか存在し、梶谷・柳田・辻村(1974: 223-224)、上田・柳田(1982: 281)にも既に数点紹介されているが、参考までに筆者が確認出来たもののみを掲げれば次の如くである。

1) D.T. Suzuki, *Essays in Zen Buddhism, First Series*, London, 1927. (pp. 347-366 に "The Ten Cow-herding Pictures" と題して廓庵の図掲載)。同書には *Essais sur le bouddhisme Zen* (traduits sous la direction de Jean Herbert, préface de J. Bacot, Paris, 1940) という仏訳が存在し、pp. 467-482 に対応部分が訳されているが図自体は掲載されていない。

2) D.T. Suzuki, *Manual of Zen Buddhism*, London, 1950. (pp. 127-144 に "The Ten Oxherding Pictures" と題して廓庵と普明の両方の図掲載)。

3) *Der Ochs und sein Hirte, Eine altchinesische Zen-Geschichte, erläutert von Meister Daizohkutsu R. Ohtsu mit japanischen Bildern aus dem 15. Jahrhundert, übersetzt von Kōichi Tsujimura und Hartmut Buchner*, Stuttgart, 1958 (Achte Auflage 1999). (廓庵のものを扱う)。

4) 上掲 Despeux (1981). (両図を対象とする)。

5) Urs App, *The Ten Oxherding Pictures*, 花園大学国際禅学研究所(電子データ), Last updated: 1996. 4. 25. (廓庵のものを対象とする)。

Dix ans de développement des études sur la littérature chinoise en France (II)

François Martin

V La prose des Han aux Song

Après avoir passé en revue les principaux travaux français récents sur la littérature en prose des Ming et des Qing, je vais encore parler de littérature en prose, mais en remontant, cette fois, à la longue période préparatoire qui va des Han aux Song et qui a vu le mûrissement des genres narratifs, avant leur grande éclosion sous les Ming. Comme il s'agit dans l'ensemble d'une littérature plus éloignée des genres auxquels le public français est habitué, les ouvrages de cette période sont moins bien accueillis par les éditeurs, et le nombre des ouvrages traduits ou étudiés est beaucoup moins important que pour la période suivante.

Pour les Han, on dispose maintenant d'une traduction partielle, accompagnée d'une présentation, par Jacques Pimpaneau, sous le titre *Jardin d'anecdotes*. Pour les Six Dynasties, trois travaux importants sont à enregistrer.

Tout d'abord, une équipe de traducteurs, dans laquelle on retrouve Rainier Lanselle et André Levy, sous la direction de Rémi Mathieu, a livré en 1992 une traduction du *Soushenji* 搜神記 de Gan Bao 干寶 (*A la recherche des esprits*, Gallimard, 1992). Malheureusement, pour des raisons éditoriales, la totalité du manuscrit n'a pu être éditée, et ce n'est en fait qu'un peu plus de la moitié du texte original qui a été traduit (245 anecdotes).

Les Six Dynasties sont particulièrement connues pour avoir vu le développement de l'anecdote. Le *Soushenji* en est une illustration, dans le domaine surnaturelle. L'anecdote historique et, plus généralement, « humaine », est surtout illustrée par ce chef-d'œuvre qu'est le *Shishuo xinyu* 世說新語, pour lequel il manque encore une traduction française intégrale. S'agissant d'un ouvrage que le grand public français aurait peut-être du mal à apprécier, et comme il en existe une excellente traduction anglaise comprenant le commentaire de Liu Xiaobiao 劉孝標, par R. Mather, il est probable que ce manque ne

sera pas comblé de si tôt. Il est d'autant plus heureux que Jean-Pierre Diény ait malgré tout présente cet ouvrage au public français, en publiant *Portrait anecdotique d'un gentilhomme chinois*--- Xie An 謝安(320-385), d'après le *Shishuo xinyu* (Collège de France, Institut des hautes études chinoises, 1993). Par le choix de Xie An, ami de Wang Xizhi 王羲之, Jean-Pierre Diény entend rendre hommage au professeur Yoshikawa Kojiro 吉川幸次郎, qui, dans cette époque pourtant riche en personnalités extraordinaires que furent les Jin de l'Est 東晉, appréciait ce personnage plus que tout autre.

La démarche de cet ouvrage est originale : il s'agit de découvrir le *Shishuo xinyu* en suivant un fil conducteur, Xie An, personnage particulièrement riche et bien représentatif de l'esprit indépendant et altier des aristocrates de l'époque des Jin, âge d'or des « purs propos » (qingtan 清談). Après une présentation générale du personnage et de la période où il vécut, nous suivons le « héros » à travers plusieurs chapitres où sont présentés ses traits caractéristiques, son aptitude au qingtan, son talent pour reconnaître les hommes capables, l'appréciation de ses contemporains à son égard, etc. Comme l'auteur le précise bien, il ne s'agit donc pas d'une biographie objective de Xie An (on serait bien en peine de s'assurer de l'authenticité des diverses anecdotes traduites), mais du portrait culturel d'une époque, vue à travers les idéaux humains qu'elle s'était donnée.

Le *Shishuo xinyu* étant le produit achevé d'une longue tradition, typiquement chinoise, d'étude des caractères humains, il sera bien venu ici, quoiqu'il ne s'agisse pas à proprement parler d'histoire narrative, de mentionner pour finir la récente traduction de l'ouvrage théorique le plus ancien et le plus complet sur cette question, le *Traité des caractères* (*Renwu lun* 人物論) de Liu Shao 劉邵, par Anne-Marie Lara, disciple de Jean-Pierre Diény (Gallimard, 1997).

VI Les écrits philosophiques et politiques

Après avoir traité des ouvrages en prose d'intérêt « littéraire » (au sens occidental du mot), et sans chercher à faire la différence entre la prose en langue vulgaire et la prose classique--- distinction qui perd beaucoup de son sens quand il s'agit de traduction ---je voudrais parler maintenant des travaux sur les Classiques et les ouvrages des diverses

écoles de philosophie (au sens large). Ceux-ci, s'ils échappent en grande partie à ce que l'on considère en Occident comme le domaine littéraire, peuvent lui être légitimement annexes dans la conception chinoise du mot.

J'ai déjà dit, au début de cet article, que c'est par ses idées politiques que la Chine a été révélée aux Français du 18^e siècle. L'intérêt des intellectuels français pour la vie politique chinoise, en passant par la Révolution culturelle et jusqu'aux actuelles tentatives de conciliation du socialisme et du capitalisme, ne s'est jamais démenti. Pourtant, jusqu'à une date très récente, si l'on excepte quelques ouvrages très généraux sur la culture chinoise, on manquait encore des matériaux nécessaires à la compréhension de la pensée politique et morale chinoise, dans toute sa profondeur historique et culturelle. On va voir que, à cet égard aussi, les dix dernières années ont été marquées par une évolution radicale.

On sait par ailleurs que, non seulement en France, mais aussi dans tout l'Occident, se existe depuis déjà longtemps un engouement marqué pour une certaine forme de « mysticisme » se nourrissant de taoïsme, de bouddhisme zen, du *Yijing* 易經, etc. Il est très frappant à cet égard de voir la place qu'occupent, dans les vitrines des nombreuses librairies occultistes de la capitale française, les nombreux ouvrages participant de cette tendance, et qui vont des travaux les plus sérieux jusqu'à de prétendus « guides pratiques » consacrés à la divination par les hexagrammes, à la pratique d'un Zen trop souvent mal compris, etc. Un grand nombre, voire la plupart, de ces ouvrages, sont de très basse qualité, et peuvent même dans certains cas être qualifiés de ramassis d'élucubrations ou d'escroqueries intellectuelles. Il serait cependant injuste d'oublier qu'existent toujours, à côté de ces produits de la mode, d'excellentes publications, dûs à de très sérieux chercheurs spécialisés dans les domaines du bouddhisme et du taoïsme, mais la plupart de leurs travaux étant plutôt des travaux de recherche que des traductions ou présentations de textes, ils se situent en dehors des limites que je me suis fixées ici.

Pour commencer par les classiques du confucianisme, on ne disposait depuis déjà longtemps que des traductions, faites au début du siècle par le père Séraphin Couvreur, de l'ensemble des Quatre livres (*Sishu* 四書) et des Cinq classiques (*Wujing* 五經), à l'exclusion toutefois du *Yijing*. Précieuses surtout en raison du manque de travaux plus modernes, elles abondent en erreur de traduction, entremêlent trop souvent le texte et son

exégèse, et sont en bref inférieures en tous points aux traductions anglaises de James Legge.

Fort heureusement, de nets progrès ont été faits en ce qui concerne les Quatre livres, et notamment les *Entretiens* (*Lunyu* 論語), dont il existe maintenant plus de trente traductions dans les diverses langues occidentales. Ce dernier ouvrage a fait l'objet, en quelques années, de trois excellentes traductions, abondamment annotées, toutes trois œuvres de sinologues du meilleur niveau. Il s'agit, dans l'ordre chronologique, des *Entretiens de Confucius* (Seuil, 1981), par Anne Cheng, laquelle vient de publier tout récemment un très important ouvrage général sur la pensée chinoise (*Histoire de la pensée chinoise*. Seuil, 1997), destiné à faire date dans la sinologie française ; *Les entretiens de Confucius*, par Pierre Ryckmans (Gallimard, 1987), et enfin *Confucius --- Entretiens avec ses disciples*, par André Lévy (Flammarion, 1994). La multiplicité même de ces travaux repose les problèmes fondamentaux de la traduction. Comme le dit lui-même le troisième de ces récents traducteurs du *Lunyu*, André Lévy, pourquoi retraduire une œuvre dont il existe déjà d'excellentes traductions ? Comme il le dit lui-même, il reste toujours dans les textes anciens des choses à découvrir, des passages susceptibles de nouvelles interprétations, etc., mais surtout, puisque les langues occidentales, à la différence du japonais, n'utilisent pas les caractères chinois, et font de plus usage de concepts souvent fort différents de ceux de l'Extrême-Orient, chaque mot, chaque phrase, doit être « adapté », plutôt que « traduit ». Il s'ensuit que le traducteur occidental procède fatalement à des choix qui peuvent être très variables d'un auteur à un autre, même quand ceux-ci comprennent fondamentalement le texte de la même manière. Cela est d'autant plus vrai, évidemment, dans le cas d'interprétations nouvelles. André Lévy en propose justement de très audacieuses, inédites en Chine même. Ainsi de la fameuse formule de Confucius, « le sage n'est pas un instrument (susceptible d'un emploi unique) », junzi bu qi 君子不器, qu'il propose de comprendre : « le sage ne juge pas (les hommes) ». Il ne s'agit là que d'un exemple des nombreuses innovations de cette traduction, que l'on peut parfois discuter, sans doute, mais qui constituent certainement de riches apports à la compréhension du texte.

La *Grande étude* (*Daxue* 大學) et l'*Invariable milieu* (*Zhongyong* 中庸), qui sont les deux textes les plus courts des Quatre livres, mais dont sait le rôle fondamental qu'ils

ont joué dans la cristallisation de l'idéologie dominante en Chine au long des derniers siècles, ont fait également l'objet de traductions récentes : Martine Hasse a publié en 1984 *Tseng-tseu* 曾子, *La grande étude* (Cerf), dans laquelle elle a également traduit le commentaire de Zhu Xi 朱熹, en y ajoutant une bonne étude historique sur le texte lui-même et sur les philosophes qui ont lui ont attaché une importance particulière : Zhu Xi, Shao Yong 邵雍 et les deux Cheng 二程. Plus récemment, François Jullien a publié *Zhong Yong, la régulation à usage ordinaire* (Imprimerie nationale, 1993), dans l'introduction duquel on trouve, à propos des problèmes de la traduction et de la réception réelle des écrits philosophiques chinois en France, des réflexions d'autant plus précieuses qu'elles émanent d'un auteur qui est connu comme philosophe autant que comme sinologue.

Ne manque donc plus, pour les Quatre livres, qu'une nouvelle traduction du *Mengzi* 孟子, dont l'absence est d'autant plus regrettable que, non content d'être un des fondements de la pensée chinoise, ce texte est aussi un des chefs d'œuvre de la littérature chinoise ancienne.

En ce qui concerne les Cinq classiques, la situation est, malheureusement, nettement moins bonne. Le *Yijing* a fait l'objet de plusieurs traductions, mais la meilleure reste une des plus anciennes, par Paul-Louis-Félix Philastre, rééditée récemment avec une introduction de François Jullien (*Le Yi king*, Zulma, 1992).

Pour ce qui est des autres classiques, si les *Rituels* (*Li* 禮) ne peuvent guère être considérés, à l'exception de certains chapitres, comme une matière littéraire, et si le Livre des documents (*Shujing* 書經) reste plutôt un sujet d'étude pour les philologues et les historiens de la haute-antiquité, on ne peut que ressentir, sur le plan de l'histoire littéraire générale, comme un très grave manque l'absence de traductions modernes du Classique de la poésie, le *Shijing* (une traduction partielle, basée de toute évidence sur une traduction chinoise en baihua 白話, est à peine digne d'être mentionnée), et de la *Chronique des Printemps et automnes*, *Chunqiu* 春秋, ou plutôt, en fait, de l'illustre *Commentaire de Zuo* (*Zuozhuan* 左傳) dont la valeur littéraire est incontestable.

Pour en terminer avec les classiques du confucianisme, on se félicitera de la publication d'une excellente et savante traduction du *Xunzi* 荀子, par Marc Kamenarovic (Cerf, 1987).

En ce qui concerne les grands textes du taoïsme, et bien qu'il ne s'agisse pas d'une nouvelle traduction, la réédition récente, dans la Bibliothèque de la Pléiade, des traductions du *Laozi* 老子 et du *Zhuangzi* 莊子 par Liu Kia-hway, ainsi que de celle du *Liezi* 列子 par Benedikt Gryn timer, regroupées sous le titre *Philosophes taoïstes* (Gallimard, 1996), peut être considérée comme un événement en soi. Non d'ailleurs que de nouvelles traductions, intégrales ou partielles, de chacun de ces trois ouvrages n'aient vu le jour : le *Laozi* a fait l'objet de deux d'entre elles, par Bernard Botturi (*Lao-tseu, T'ao-tö king*, Cerf, 1984) et Claude Larre (*Tao Te King*, Desclée de Brouwers, 1994). Par ailleurs, Jean-Claude Pastor a livré une nouvelle traduction des chapitres intérieurs (*neipian* 內篇) du *Zhuangzi* (*Zhuangzi --Les chapitres intérieurs*, Cerf, 1990). Enfin, Jacques Lafitte a publié une nouvelle traduction du *Liezi* (*Lie-tseu ---Traité du vide parfait*, Albin Michel, 1997).

On peut donc constater que dans le domaine des textes philosophes ou assimilables de l'antiquité beaucoup de travail a été accompli, mais, à mon sens, l'avancée la plus spectaculaire, dans de même domaine, a eu pour cadre une période presque inexplorée, celle des Han et celle qui la précède immédiatement, c'est-à-dire, en bref, l'époque de transition entre antiquité et âge classique qui a vu la cristallisation du système de pensée chinois ancien. Plusieurs travaux d'une grande importance sont à mentionner. Je le ferai ici sans essayer de les classer autrement que par ordre chronologique de la parution.

En 1985, Jean Lévi, déjà bien connu par ses études sur les mécanismes du pouvoir dans la Chine ancienne, a présenté au public français, sous le titre *Dangers du discours --- Stratégies du pouvoir, IVe-IIIe s.av. J.-C.* (Alinea), les penseurs légistes ou assimilés, avec de nombreuses traductions d'extraits du *Hanfeizi* 韓非子, du *Shangyang* 商鞅, du *Lushi chunqiu* 呂氏春秋, du *Shenzi* 慎子, ainsi que des textes découverts à Mawangdui 馬王堆 en 1973 et considérés comme correspondant aux fameux *Quatre classiques de l'Empereur jaune* (*Huangdi sijing* 黃帝四經), bien qu'il puisse s'agir en fait de traités indépendants.

En 1992, Marc Kamenarovic a donné, sous le titre de *Wang Fu ---Propos d'un ermite* (Cerf), la traduction intégrale du *Qianfu lun* 潛夫論 de Wang Fu 王符, penseur trop souvent ignoré, esprit original, rationaliste, sceptique, successeur de Wang Chong 王充, dont l'œuvre vient également d'être partiellement traduite (v. plus bas).

En 1993, Claude Larre, Isabelle Robinet et Elisabeth Rochat de la Vallée ont publié, sous le titre *Les grands traités du Huainanzi* (Cerf), la traduction de plusieurs des traités

les plus importants du *Huainanzi* 淮南子, titre de ces traités ainsi que la préface de Gao You 高誘.

Tout récemment, le sinologue suisse Nicolas Zufferey a publié *Wang Chong - Discussions critiques* (Gallimard, 1997). Dans sa très intéressante introduction, l'auteur analyse la composition du *Lunheng* 論衡 de Wang Chong, dont il a traduit, complètement ou partiellement, les quatorze (sur 85) chapitres qui lui paraissent représenter le mieux la pensée de ce confucianiste sceptique et farouchement indépendant.

Plus près de nous encore, Marc Kamenarovic a publié la traduction intégrale des *Printemps et automnes du seigneur Lu* (*Lushi chunqiu*), ouvrage dont la publication peut, à mon sens être considérée comme un événement digne d'être salué, non seulement par l'intérêt du texte, mais aussi parce qu'elle montre que les éditeurs français peuvent maintenant prendre le risque de publier en version intégrale des ouvrages imposants par leur volume mais qui ne sont pas d'anciennes vedettes de la littérature chinoise.

Pour en finir avec les ouvrages proprement philosophiques, mais cette fois avec une période beaucoup plus récente, je voudrais mentionner, beaucoup plus près de nous, la très agréable traduction, par Jacques Gernet, sous le titre *Tang Zhen* 唐甄, *écrits d'un sage encore inconnu* (Gallimard, 1991), du *Qianshu* 潛書 de Tang Zhen, qui vécut à la charnière des Ming et des Qing, penseur attachant, émouvant, au ton souvent passionné, et chez qui l'idéalisme et l'abstraction se mêlent à un sens très poussé du concret et de l'observation des choses.

J'ai laissé une place un peu à part pour les traités sur l'art de la guerre, très populaires en France, non seulement pour eux-mêmes, mais parce que beaucoup veulent y voir le secret des attitudes mentales de l'Extrême-Orient, non seulement en matière de stratégie militaire, mais aussi en matière d'économie, d'échanges sociaux, etc.

Valérie Niquet, traductrice des 1988 de *l'Art de la guerre de Sunzi* (*Sunzi bingfa* 孫子兵法, Economica), l'a complété en 1994 par *Deux commentaires de Sunzi* (Economica), ouvrage original dans lequel elle reprend sa traduction de Sunzi en l'accompagnant, paragraphe par paragraphe, des deux commentaires de Cao Cao 曹操 et de Li quan 李筌, qui sont à la fois les plus anciens et les plus riches. L'entreprise consistant à traduire, non plus seulement un ouvrage classique, mais aussi ses commentaires, est digne d'être saluée, en ce qu'elle traduit une volonté d'accéder, par l'exploration de la tradition qui les enroule,

à une connaissance plus profonde des textes anciens. En 1996, enfin, le même auteur a publié *Sun Bin, le traité militaire* (Economica), qui est la traduction intégrale du *Sun Bin bingfa* 孫賓兵法, ouvrage dont on se demandait si ce n'était pas en fin de compte le même que celui de Sunzi, jusqu'à sa découverte en 1972 dans une tombe Han. En fait, de par son approche beaucoup plus pragmatique et réaliste, cet ouvrage représente un développement très net par rapport à son ancêtre. Avec ces trois ouvrages, d'ailleurs salués par d'importantes personnalités militaires, Valérie Niquet permet donc au lecteur français une approche très sérieuse de la stratégie chinoise.

Pour en finir avec le domaine stratégique, on peut signaler la traduction par François Kircher du *Sanshiliu ji* 三十六計 (*Les trente-six stratagèmes*. Rivages, 1991), accompagné de ses commentaires et de très intéressants développements de l'auteur sur l'application plus ou moins consciente des « 36 stratagèmes » dans les attitudes sociales économiques, etc., des Chinois modernes, au 19^e et au 20^e s.

Disons pour finir un mot de ce que les Chinois nomment les « petites études » (xiaoxue 小學), c'est-à-dire les études sur l'écriture, la lecture des caractères, etc. André Kircher a publié en 1995 une traduction du *Classique des trois caractères* (*Sanzi jing* 三字經, Foreign Languages Press, Pékin), très richement documentée et qui constitue une plaisante introduction à la culture chinoise. Le même auteur prépare une traduction de *Texte en mille caractères* (*Qianzi wen* 千字文), dont il existe déjà plusieurs versions françaises.

En conclusion, en ce qui concerne les traductions des œuvres des penseurs chinois, il est permis de dire que, au même titre que pour la prose narrative, les dix ou quinze dernières années ont vu dans les études chinoises en France une avancée spectaculaire et très prometteuse pour l'avenir.

* なお本稿は前23号連載の續編であり、『中國文學報』第58册（京都大學中國文學會）に寄せられた「近十年のフランスにおける中國文學研究の發展（下）」の原佛文である（内容の一部に改訂された箇所がある）。掲載を許可下さったFrançois Martin 氏に謝意を表す。

Martin 氏は、フランス高等研究院教授（directeur d'études de l'Ecole Pratique des Hautes Etudes）

「新しい価値観の確立と古典学研究所の設置について」

中谷英明

はじめに

- 1 現代世界と古典学
- 2 近代古典学から一般古典学へ
- 3 古典学研究所の構想

はじめに

「古典学の再構築」という文部省科学研究費補助金特定領域研究が平成10年度から5年計画で実施され、ギリシャ・ローマ、日本、中国をはじめ、インド、チベット、イスラム、モンゴル、イラン、朝鮮などの古典を研究する総勢138人の研究者が、「原典」、「本文批評と解釈」、「情報処理」、「古典の世界像」、「伝承と受容（世界）」、「伝承と受容（日本）」、「近現代社会と古典」という7研究項目について、7班に分かれて共同研究を進めている。

本学会からは、高崎直道鶴見大学長が評価委員として参加されているほか、興膳宏会長を始めとする15名の方々が、計画研究、公募研究の代表者としてこの領域横断的研究プロジェクトに参加している（赤松、岩田、丘山、川合、木津、興膳、斎藤、徳永、礪波、中谷、羽田、濱田、堀池、矢野、吉田の各氏。平成12年末現在）。

近代古典学は、周知のとおり、19世紀前半のヨーロッパにおいて、科学的研究を古典学の諸分野に応用するものとして誕生した。諸文明の伝統的古典学より実証性と論理性において格段に優れたこの古典学は、

以来、大学などの公的機関において恒久的組織を保證されつつ大規模な予算を投じて継続されてきており、その蓄積された成果は膨大である。近代国家が新しい世界観を獲得し、価値観を確立するにあたって、その基盤形成に重要な役割を果たしてきた。

日本は明治の中期から国家的事業としてこれを大学の中に積極的に取り入れ、今日では主要な文明のすべてにわたって高水準の古典学を維持するに至っている。そればかりでなく今日、世界において、どの文明についても高水準の古典学が存在するのは日本のみであるといっても過言ではなかろう。

近代古典学が19世紀初頭に成立して以来、各文明の古典は個別に研究され、横の連携がはかられたことはなかった。「古典学の再構築」はこれを反省し、古典諸学の包括的連携によって近代古典学の方法論的刷新を試みている。

また近年20年間における情報処理技術の発達は古典学に革新的な影響を及ぼしつつあり、標準的方法の確立と普及が急がれる。これも「古典学の再構築」の課題である。高度な情報処理技術の利用なくしては将来、古典学は存立し得ないであろう。

他方また近代古典学は成立当時の西欧中心主義を方法論と学的枠組みにおいて包含している部分があり、「古典学の再構築」はこれを超克して諸文明の古典を偏見なく理解し、評価することにも努めている。

さらに、こうして位置付けられた古典作品のうち、評価の高い作品の正確かつ魅力的な日本語訳を公開することによって、新しい古典像、すなわち新しい人間観、世界観を提示したい。

それは、今日の多極・多文明世界にふさわしい普遍的価値観の構築に大きく貢献するであろう。「教育」、「生命倫理」、「環境」など現代の諸問題は、変容する世界に対応する人間観、世界観の未成熟に起因すると考えられる。再構築され、刷新された古典学（それを「一般古典学」の名で呼びたいと思っている）は、正確な世界観を提示し、価値観構築の基盤を提供し得るであろうと期待される。

この最後に述べた観点から、「古典学の再構築」総括班は、日本学術会議に対して「新しい価値観の確立と古典学研究所の設置について」という提案を行い、それは第17期第1部の3研究連絡委員会（語学・文学、西洋古典学、東洋学）において対外報告として採択された。

この提案は、昨秋発足した日本学術会議第18期の各委員会においても引き続き審議していただきたいと考えている。以下にその概要を略述させていただく。なお提案として未完成であり、改善すべき点が多々あることと思う。会員諸氏のご批判、ご教示をいただくことができれば有難い。

1. 現代世界と古典学

(1) 科学技術による近代化

近代西欧の科学技術文明は、20世紀に至り伝統文明世界に広く浸透した。近代化は多くの人々を苦役から解放し、貧困、飢餓、疾病などから救出しつつある。戦争、環境破壊、薬害、交通事故、自殺など新たな問題を引き起こしつつも、その恩恵は災禍に比べ比較にならないほど大きい。またその災禍は適正な科学技術の利用によって克服可能に見える。今なお貧困と飢餓のうちにある地域も多く、科学技術文明としての近代化は、今後一層速度を増して全世界的に推進されるであろう。

(2) 現代世界の混沌

欧米では、科学の合理性に基盤を置く人間中心主義が、キリスト教に代わって、あるいは世俗化されたキリスト教とともに行為規範となっている。しかし往時のキリスト教ほどの体系と権威を付与されることなく、人々はむしろ短絡的な功利志向を強めている。欧米以外の、日本を含めた世界の各地においても、近代化による世界の変容に取り残された伝統宗教や伝統モラルの形骸化と、代わるべき価値観の未確立という、この種の無秩序感が版図を広げつつある。

他方また、伝統的価値観を遵守する地域も少なくなく、交通・通信・情報技術の発達、宗教、民族意識、資本主義的モラルなど異なる規範に基づく種々の行動を錯綜、衝突させ、諸問題を惹起している（地域紛争・貧富の差の拡大・地球環境破壊・生命倫理問題・核兵器等々）。

(3) 地球文明時代における古典学の役割——一般古典学がめざすもの

現代世界における無秩序感の浸潤と碎片化した価値観の錯綜は、人類の文明が新し

い段階に入ったことを映している。諸文明世界が緊密に結ばれ、いわばひとつの地球文明が醸成されつつあるのである。

この時代にあつて古典学は、極めて重要な役割を担わなければならない。千年、ときには数千年来、伝承され、尊重されてきた諸文明の古典は、いわば人類の精神遺産の結晶である。古典学の使命は、先ずそれら古典に表される人生観、世界観、あるいは美的感覚を、その多様性において、可能な限り正確に認識することにある。さらに、地球時代の古典学は、諸文明の古典を一つの標準的方法論によって対象とする「一般古典学」という側面を形成する必要がある。

合理主義に基づき、人間の自由と尊厳を標榜する西欧人間中心主義は、17、8世紀の西欧に端を発し、近代化の波とともに全世界に流布しつつある。しかしそれは、近代西欧の特殊性に限定された思想であつて、科学に裏付けられた合理的思惟には優れるものの、人の心性や精神伝統を含めた人間の総合的考察には不十分などころがあるといわざるを得ない。

ヨーロッパ文明は科学技術力によって全世界を席卷したが、世界観に関しては、キリスト教も、西欧人間中心主義も、ヨーロッパ文明という1地域文明の2つの産物にすぎない。中国、インド、イスラーム、イスラエル、日本などの伝統文明は、それぞれヨーロッパに比肩する古典群を創造し、それぞれの豊かな文学のほかに、儒教、ヒンドゥー教、仏教、イスラーム教、ユダヤ教、神道など、独自の精神世界を形成してきており、これらの世界に西欧世界の価値観を敷衍することには無理がある。多様な伝統と価値観は、それぞれ尊重されなければな

らない。

「一般古典学」がめざすものは、古典学の諸領域間の積極的対話を通じて標準的方法論を確立し、これら諸文明の古典の伝える多様性を偏見なく、いっそう正確に認識すること、そしてそれを正確かつ美しい日本語に翻訳することである。

地球時代の世界の精神基盤となる新しい普遍的価値観は、一般古典学の提示することのような世界認識に基づいて、初めて創出することが可能となるであろう。

(4) 科学の時代の古典学

遺伝子工学、情報処理、核兵器を含む軍事技術等に象徴される科学技術の飛躍的發展は、影響力の巨大さに鑑み、これを用いる人々の確固とした価値観の存在をいよいよ重要なものとしている。基礎研究に従事する科学者、研究環境を整える官僚、国の内外の政策に関わる政治家、一般企業も含めて科学技術の応用に関わるさまざまな組織や人々、その便宜を享受する消費者など、すべての人々が、科学技術利用に関する明確な認識を持ち、適正な使用に向かうよう努めなければならない。技術の巨大化に見合った新しい価値観の形成が急務であり、古典学の責務は重い。

2. 近代古典学から一般古典学へ

(1) 文明と古典

古典は、叡智を集成した宗教聖典、神話、哲学書、法典、文芸作品、史書などとして諸文明において創造され、伝承され、またそれが素材となって新しい古典が創造される、ということを繰り返してきた。宗教規範や社会慣習、あるいは法律や政治綱領をつくりなし、また倫理的、美的源泉となり

つつ、古典は文明の精神的根幹を形成し、その活力の源となってきた。大規模な社会変革が生起した時には、古典の伝統を継承しつつ新しい古典が創出された。社会は、古典によって求心力と推進力を獲得し、維持してきたと言える。

(2) 近代古典学の使命

近代古典学の諸学は、自然学において顕著な成果を挙げた近代科学を人文学に応用するべく、18世紀末から19世紀前半のヨーロッパにおいて、ギリシア・ラテン、イスラエル、イスラム、インド、イラン、中国、日本、チベットなどの古典を対象に順次成立した。これは産業革命とフランス革命を経たヨーロッパが、外の諸文明の古典を当時の西欧の新しい価値観に従って把握し、近代社会にふさわしい世界像を形成する試みに他ならなかった。

こうして成立した近代古典学は、科学的思考に裏打ちされた文献学的手法によって伝統的古典学の恣意性、非論理性、非実証性を打ち破り、清朝考証学、サンスクリット文法学などごく一部の例外を除き、伝統古典学を圧倒し、確たる学的基盤を確立した。

日本は、明治の中期からこれら諸古典学をヨーロッパから移植し、今日ではすべての主要な文明の古典に関して高水準の研究を擁するに至っている。これら古典諸学の成果は、明治以来、日本人の世界観形成において少なからぬ役割を果たしてきた。

(3) 「古典学の再構築」の目標：一般古典学の構築に向けて

特定領域研究「古典学の再構築」は、こ

のような経緯で今日に至った古典学を刷新することを目的とする。その目標は、(1) 史上初の古典学の全主要領域の研究連携、(2) 高度の情報処理技術の応用、(3) 方法論や学的枠組みに潜む近代西欧的価値観（キリスト教以外の宗教の軽視、合理主義の偏重、西欧中心主義）の見直し、という3種の方法によって「一般古典学」の構築に努め、またそれによって古典の新しい日本語訳を提出することである。

古典学の包括的連携は、すべての古典学の領域に高水準の研究が維持されている日本においてのみ可能である。実際、「古典学の再構築」は、史上初めてこれを実現し、領域を越えた共同研究（調整班研究）や、公開国際シンポジウム、研究会の開催、ニューズレター、雑誌「古典学の現在」の発行などによって顕著な成果を挙げつつある。

(4) 文明史的意義

古来、日本文明は周辺文明の高い文化を摂取しつつ自律的發展を持続してきたが、近世絵画や陶芸などごく僅かの例を除き、他の文明に影響を与えたことはかつてほとんどなかった。一般古典学の構築は、日本人の精神性を豊かにし、新しい日本文明創出への礎（いしずえ）となるばかりでなく、世界の古典学の刷新と新しい世界観の提示という学術的、文化的発信を、世界に向かって行うこととなるであろう。

3. 古典学研究所の構想

「古典学の再構築」総括班は、平成11年末より日本学術会議第1部に報告案「新しい価値観の構築と古典学研究所の設置について」を提案した。これは語学・文学、西

洋古典、東洋学の3研究連絡委員会において採択され、なお継続審議中である。この「古典学研究所」の理念の詳細は上記のとおりであるが、ここに理念、組織、特長等の概要をまとめれば以下ようになる。

(1) 設立の理念

我が国に古典研究の世界的中心を創設し、新しい古典学（一般古典学）を確立するため、大学共同利用機関「古典学研究所」を設置する。

現在、各地の大学や研究機関に存在する古典に関わる諸講座（中国哲学・文学、インド哲学・文学、西洋古典学、国文学、哲学、倫理学、美学等々）の中核となる研究所を設立し、諸古典学間の研究連携を確保することにより、また情報処理技術を積極的に活用することにより、新しい古典学と古典像を創造する。これは新しい日本文明形成の礎となるであろう。また、科学の時代の世界の精神基盤となり、諸文明を包括する地球文明時代にふさわしい、新しい価値観の構築に貢献するであろう。

(2) 構造・組織・構成

A. 構造

中心部（教官定員約20名）と、周辺拠点（客員教官定員約30名。主要大学の関連部分を指定し、その教官を客員教官として位置付ける）から成るネットワーク型機関とし、既存の古典学講座に在籍する研究者を最大限にネットワークに組み込む。

B. 組織

研究所は、研究部（a.世界観・人間観研究部、b.生成・受容研究部、c.本文・原典研究部）および情報連携部（a.情報管理部、b.連携国際部）の2部から成る。「研究部」は古典学固有の研究を遂行し、「情報連携部」

は、データベース構築、標準情報処理技法開発、および国際古典学会と日本古典学会という内外の2学会の事務局として、和文、欧文の学会誌の編集業務等を行う。

C. 構成

研究部・情報連携部の研究者は、日本、中国、インド、ギリシア・ローマ、イスラーム、イスラエル、メソポタミア、朝鮮、イラン、チベット、東南アジアなどの古典研究者の他、法学、哲学、教育学、情報処理学、経済学などの研究者を加える。

定員の2割程度を外国人研究者とする。

(3) 研究所の特長

A. 連携研究

諸古典学の包括的共同研究、および古典学以外の領域との学科、学部の枠を超えた連携研究を行う。これは「一般古典学」構築の必須の条件である。

B. 情報処理技術・統計分析の活用

i. テキスト及び画像大規模データベースの構築と公開、ii. 電子図書館の収集、iii. 古典文献情報処理法と統計処理法の開発と普及など。今後の古典学は、高度情報処理技術、統計分析法の積極的活用なしにはあり得ないと考える。

C. 国際的情報発信と国際的連携

一般古典学は、方法論の刷新と新しい文明観の提示によって、世界の古典学および知的世界への重要な学術的、文化的貢献をなすであろう。

また将来古典学が確立されるであろうアジア、中東、南米、オセアニアなどの国々の研究者とも密接な連携を保持しつつ、国際学会を組織し、国際学術雑誌を編集する。

（「古典学の再構築」領域代表・神戸学院大学）

2000-2001 コレージュ・ド・フランス講義題目抜萃 (東洋学関係)

Langues et religions indo-iraniennes

Jean Kellens "Pourquoi la philologie avestique a-t-elle entériné le mythe préscientifique de Zoroastre ?"

les vendredis à 9 h 30, dans la salle 1. (Ouverture le 24 novembre.)

(Voir également cours à l'étranger : Suède.)

Séminaire : *Les Aryas en Asie Centrale, en Iran et en Inde*,
séminaire commun avec la Chaire d'Histoire du Monde indien,
les jeudis 4, 11, 18, 25 janvier 2001, de 10 h à 19 h, dans la salle 2.

Histoire du monde indien

Gérard Fussman "Problèmes de méthode en histoire ancienne de l'Inde "(en relation avec le séminaire)

les vendredis à 11 h 30, dans la salle 1. (Ouverture le 5 janvier)

Séminaire : *Les Aryas en Asie Centrale, en Iran et en Inde*,
séminaire commun avec la Chaire de Langues et Religions indo-iraniennes,
les jeudis 4, 11, 18, 25 janvier 2001, de 10 h à 19 h, dans la salle 2.

Histoire de la Chine moderne

Pierre-Étienne Will "Les figures de l'Administrateur en Chine 1600-1930, (suite) : le problème du XIXe siècle",

les mercredis, à 14 h 30, dans la salle 2. (Ouverture le 17 janvier)

(Voir également cours à l'étranger : Italie.)

Séminaire : *Recherches autour du Mengqi bitan de Shen Gua et de la société des Song du Nord (suite)*,
les mercredis, à 15 h 45, dans la salle 8. (Ouverture le 17 janvier)

<http://www.college-de-france.fr/>

2000-2001 フランス高等研究院講義題目抜萃 (東洋学関係)

HISTOIRE

Histoire et civilisations de l'Asie

◆ Histoire économique et sociale de la Chine prémoderne

Pierre-Étienne Will, directeur d'études

1. Manuels et anthologies pour administrateurs à la fin de l'empire.

Lundi de 14 h à 16 h (salle 252, Institut des hautes études chinoises, Collège de France, 52 rue du Cardinal-Lemoine 75005 Paris), à partir du 4 décembre.

Présentation d'ouvrages analysés dans le cadre du programme bibliographique « Official Handbooks and Anthologies of Imperial China : A Descriptive and Critical Bibliography » actuellement en cours au Collège de France. Lecture de textes. Discussion générale sur les genres concernés et leur insertion dans la vie administrative chinoise.

2. Discussion de travaux d'étudiants.

Lundi de 10 h à 12 h (salle 451, 54 bd Raspail), date fixée ultérieurement.

Pierre-Étienne Will et Christian Lamouroux, directeurs d'études Irrigation, société et gestion des conflits en Chine du Nord (XIXe-XXe siècles) (suite).

Jeudi de 11 h à 13 h (salle 451, 54 bd Raspail) les 30 novembre, 14 décembre, 11 et 25 janvier, 8 et 22 février, 8 et 22 mars, 5 avril, 3, 17 et 31 mai.

Analyse de documents sur les conflits hydrauliques dans les provinces du Shanxi et du Shaanxi collectés à l'occasion de missions sur le terrain depuis 1995.

◆ Société, pouvoirs et processus politiques dans la Chine du XXe siècle

Yves Chevrier, directeur d'études

La construction du politique dans la Chine d'aujourd'hui : l'État et le social.

1er, 3e et 5e mardis du mois de 14 h à 16 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 21 novembre.

Nos analyses de ces dernières années ont permis de situer tant la révolution que le régime maoïste et la période des réformes post-maoïstes dans une perspective de formation étatique.

L'étude des formes revêtues par l'État et par ses interventions sur la société fait apparaître la spécificité du moment actuel, où l'État compose avec des forces sociales extérieures à son système (et à son idéologie) sans se décomposer pour autant. L'approche courante consiste à analyser cet « extérieur », dont une bonne part est constituée par des pans de l'appareil d'État lui-même, en termes de segmentation sociale, de structures communautaires ou de réseaux dominés et exploités par l'appareil bureaucratique. Nous nous proposons d'explorer ces phénomènes sous un angle complémentaire : celui de la recomposition de la société autour de la question du travail qu'entraînent les restructurations de l'agriculture, les migrations intérieures et la remise au cause des structures socialistes dans le secteur d'État, longtemps contourné par les réformes. Comment les acteurs sociaux et l'État agissent-ils par rapport à ces transformations fondamentales dans la répartition économique, sociale et géographique du travail, ainsi que dans son organisation et dans la protection des salariés ? Peut-on dire que se dessine une configuration de la société comme ensemble du social au-delà de structures et d'un imaginaire encore communautaires ? À travers quels modes d'action sociale, quelles formes d'intervention de l'État, quelles institutions, quelles catégories ? Ces interrogations seront l'occasion de situer la formation étatique post-maoïste par rapport aux itinéraires sociaux et politiques des États nations de l'Occident industriel et post-industriel.

Michel Bonnin, maître de conférences

1. Pouvoir et société en République populaire de Chine : les avatars du totalitarisme.

Vendredi de 11 h à 12 h 30 (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 17 novembre.

Le sujet sera traité en deux parties correspondant à deux périodes historiques :

– La période maoïste : l'ambition totalitaire et ses limites. On étudiera les deux outils principaux du contrôle de la société par le pouvoir : le système relativement stable

comprenant le hukou, la danwei, le dang'an et le comité de quartier ; les mouvements (yundong) par lesquels le pouvoir a mobilisé périodiquement la société. On verra que malgré la redoutable efficacité du système, on a assisté dans les années 70 à une extension de la résistance passive, à l'apparition d'une dissidence souterraine et, finalement, à l'explosion du 5 avril 1976, premier mouvement politique spontané d'une certaine ampleur, qui marque la fin de l'ère maoïste.

– La contradiction réformiste : depuis le lancement des réformes, la contradiction n'a cessé de s'aggraver entre la politique de libéralisation économique et la tentative de maintenir l'essentiel du système de dictature politique et de contrôle social. La libéralisation économique a contraint le régime à réduire ses ambitions. D'où l'apparition, dans les années 80, d'embryons de société civile et d'une volonté d'autonomie sociale qui a servi de terreau à l'explosion politique du printemps 1989. La répression et la terreur n'ont pas empêché la réapparition périodique, au cours des années 90, d'une fronde idéologique, sociale et politique. Malgré tout, le monopole du Parti communiste chinois ne semble pas près d'être battu en brèche. On se demandera quelle peut bien être la recette magique du totalitarisme qui a permis au PCC de conserver un pouvoir politique absolu malgré les énormes bouleversements économiques et sociaux qui ont suivi les réformes.

2. Pouvoir et société à Hong Kong, de 1945 à nos jours (avec Jean-Philippe Béja, directeur de recherche au CNRS).

Vendredi de 11 h à 12 h 30 (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 9 mars.

Malgré une brève tentative de démocratisation en 1945, la fin de la Seconde Guerre mondiale n'a pas amené de changement important dans le rapport traditionnel entre le pouvoir colonial britannique et la société hongkongaise. Les émeutes de 1967, liées à la Révolution culturelle sur le continent, conduiront cependant les Britanniques à réfléchir aux moyens d'une meilleure coexistence entre les deux. Les années 70 seront ainsi des années de bienveillant paternalisme qui permettront de stabiliser la société. Mais, dès cette époque, celle-ci commencera à revendiquer un plus grand rôle politique. C'est au cours des années 80 que cette revendication se concrétisera dans des institutions durables qui s'affirmeront face au pouvoir. Le développement socio-politique, les liens de plus en plus étroits entre Hong Kong et le Continent ainsi que l'environnement international et notamment la démocratisation de Taiwan expliquent ce changement important. La répression du mouvement démocratique en Chine, de même que l'approche de la rétrocession, vont radicaliser et accélérer cette évolution. Depuis 1997, la volonté du pouvoir de Pékin et de celui de la Région Administrative Spéciale de bloquer cette dynamique entraîne une situation plus conflictuelle dont on évaluera les issues possibles.

◆ Territoire et savoirs en Chine : la formation de l'État prémoderne

Christian Lamouroux, *directeur d'études*

Territoire et finances publiques sous les Song (Xe-XIIIe siècle) (suite).

Mardi de 16 h à 18 h (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 7 novembre.

On continuera à étudier les relations entre la centralisation du territoire chinois au XIe siècle et l'organisation des finances publiques. Le propos sera davantage centré sur les aspects monétaires de la centralisation. L'enquête partira encore de la lecture et de l'analyse du *Mengqi bitan (Notes du ruisseau des rêves)* de Shen Gua (1031-1095) et explorera les institutions et les réformes monétaires du XIe siècle, ainsi que certaines théories sur la

monnaie.

◆ Histoire de l'Asie centrale post-mongole

Vincent Fourniau, *maître de conférences*

Espace, peuplement et identité ethno-politique en Asie centrale post-mongole.

Enseignement suspendu durant l'année universitaire 2000-2001.

Svetlana Gorshenina, *professeur à l'Université de Tachkent*

maître de conférences invitée au titre de la coopération internationale

Formation de la conscience historique dans l'Asie centrale.

Mardi de 11 h à 13 h (salle 801, 54 bd Raspail), à partir du 16 janvier.

L'Asie centrale ex-soviétique a été l'objet d'une longue et riche tradition scientifique, dans le cadre de laquelle depuis deux siècles se sont opposées des écoles scientifiques différentes. Chacune de ces écoles – russe (puis soviétique et, enfin, indépendante), française, anglaise et allemande – a élaboré sa propre vision de l'histoire centre-asiatique. Ces écoles sont généralement assez distantes les unes des autres. L'histoire des recherches centre-asiatiques en Europe et les résultats des efforts intellectuels des scientifiques occidentaux sont bien connus, tant parmi les spécialistes que dans un plus large public. En revanche, l'histoire de l'école centre-asiatique se trouve actuellement en marge de l'histoire des sciences humaines, exilée en quelque sorte de l'espace épistémologique moderne. Cependant, une analyse approfondie des systèmes de raisonnements, des postulats de réflexions et des relectures critiques des œuvres dans l'optique des relations entre société, science et politique, présente un certain intérêt dans le contexte de l'historiographie comparée (notamment, dans les parallèles entre l'école russe et l'école française). Pour cette raison, il m'a semblé utile d'effectuer au cours du séminaire une approche de caractère historiographique et épistémologique de cette région. L'accent sera mis sur histoire de l'école d'études centre-asiatiques russe, puis soviétique, qui s'est développée à Moscou, Saint-Pétersbourg, Tachkent et Duchanbe de 1860 à 1950 : histoire des grands établissements de recherche et histoire de l'enseignement supérieur, reconstitution de la biographie de certains historiens illustres, pour la majorité victimes des répressions staliniennes, histoire des mutations du corps des chercheurs ; rapports entre les scientifiques russes et leurs collègues centre-asiatiques (école russe dite du Centre, à Moscou et Saint-Pétersbourg, école russe de province, école nationale locale) ; poids des idéologies successives (impériale russe, soviétique, nationaliste moderne) ; gestion de la science par l'État ; problèmes historiques les plus politisés, qui se reflètent avec des modulations différentes dans les œuvres de plusieurs générations ; création ou, au contraire, destruction de traditions d'études orientales en ex-URSS ; distinction entre les courants de pensées divers à l'aube du système totalitaire, pendant les années 1920.

◆ Histoire économique et sociale de l'Inde et de l'Océan Indien, XVe-XVIIIe siècle

Sanjay Subrahmanyam, *directeur d'études*

Enseignement suspendu durant l'année universitaire 2000-2001.

◆ Histoire de la Corée coloniale

Alain Delissen, *maître de conférences*

Histoire sociale coloniale (1876-1945) : peut-on parler de « modernisation sociale » Cinquième volet : cultures urbaines (suite).

1er et 3e mercredis du mois de 18 h à 20 h (salle de cours, Maison de l'Asie, 22 av du Président-Wilson 75116 Paris), à partir du 15 novembre.

Parente pauvre de l'historiographie coloniale de la péninsule sous occupation japonaise, l'histoire sociale coréenne du premier XXe siècle est tantôt soumise à la pression de la grille de lecture politique – voire morale – tantôt à celle de la « modernisation », tour à tour index et moteur du changement social, norme et processus. À travers des exemples tirés essentiellement de la société urbaine séoulite, coréenne et japonaise, on s'interrogera précisément sur les liens entre changement social et modernisation dans un contexte ambigu : colonial mais développeur, voire industrialisant. En variant les angles, échelles, outils, période on tentera de déplacer les questionnements ordinaires (collaboration vs résistance, exploitation vs développement) vers – fût-elle encore fragmentaire – une cartographie dynamique des mutations de la société nippo-coréenne.

LINGUISTIQUE, SÉMANTIQUE

◆ Linguistique japonaise et occidentale : problèmes, méthodes et histoire

Irène Tamba, *directeur d'études*

Sémantique et écriture : étude des termes japonais et coréens exprimant l'intériorité et de leurs correspondants graphiques en chinois.

Jeudi de 13 h à 15 h (salle 1, 105 bd Raspail), à partir du 9 novembre.

La définition linguistique de l'intériorité dépend des différents termes qui en assurent l'expression dans une langue donnée, tout en étant soumise à certaines contraintes générales qui relèvent de la perception humaine. Une des difficultés majeures de l'analyse sémantique de cette notion est de discerner le rôle respectif et l'interaction des facteurs externes et internes. Or, l'adoption de l'écriture chinoise amène à une analyse contrastive des morphèmes de chaque langue en obligeant à choisir les caractères chinois qui notent les termes sémantiquement proches de ceux de coréen et du japonais. Nous nous proposons donc d'examiner comment s'est fait l'ajustement sémantique des trois systèmes d'expression de l'intériorité au niveau de leur transcription écrite. Les déplacements, distorsions, remaniements qui ont conduit aux solutions fixées par la graphie de chaque langue devraient permettre d'explicitier les représentations sémantiques de l'intériorité qui en sont responsables.

R. Djamouri, *chargé de recherche au CNRS* et sinologue du CRLAO, a accepté de nous prêter son concours pour la partie chinoise de cette étude.

Cf. également le séminaire avec Mme Fisher « Méthodes en linguistique ».

◆ Linguistique chinoise : histoire de la langue et de ses représentations

Alain Peyraube, *directeur d'études*

avec Redouane Djamouri, *chargé de recherche au CNRS*

Syntaxe et sémantique historiques du chinois médiéval.

Lundi de 16 h 30 à 19 h 30 (salle 451, 54 bd Raspail), à partir du 20 novembre.

Le séminaire sera consacré à l'étude de l'évolution et du changement des structures syntaxiques et sémantiques de la langue chinoise pré-médiéval (iie siècle avant Jésus Christ - iie siècle) et médiévale (iiiie-xiie siècle). Les problèmes suivants seront abordés : classificateurs nominaux, système de la négation, les pronoms, les verbes auxiliaires modaux, les formes passives. Des textes bouddhiques seront également commentés et expliqués.

<http://www.ehess.fr/>

日仏東洋学会平成 10 年度決算

◇収入

	(円)
普通会員会費	258,000
前年度繰越金	344,485
日仏会館補助金	0
利子	744
計	603,229

◇支出

	(円)
印刷費	0
通信費	20,960
会議費	9,030
消耗品費	2,775
支払報酬費	0
雑費	3,000
旅費	50,000
予備費	0
計	85,765

総収入—総支出： 603,229 円-85,765 円=517,464 円
平成 10 年度残金 517,464 円は、平成 11 年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。

平成 11 年 3 月 24 日

日仏東洋学会監事

加藤純章 

岡本さえ 

日仏東洋学会平成11年度予算(案)

◇収入

	(円)
普通会員会費	300,000
前年度繰越金	517,464
日仏会館補助金	0
計	817,464

◇支出

	(円)
印刷費	400,000
通信費	70,000
会議費	30,000
消耗品費	5,000
支払報酬費	20,000
雑費	20,000
旅費	50,000
予備費	222,464
計	817,464

日仏東洋学会平成11年度決算

◇収入

	(円)
普通会員会費	267,000
前年度繰越金	517,464
日仏会館補助金	0
利子	559
計	785,023

◇支出

	(円)
印刷費	182,700
通信費	40,100
会議費	7,080
消耗品費	840
支払報酬費	0
雑費	3,000
旅費	0
予備費	0
計	233,720

総収入—総支出:785,023円—233,720円=551,303円
平成11年度残金551,303円は、平成12年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。
平成12年3月24日

日仏東洋学会監事

加藤純章 

岡本さえ 

日仏東洋学会平成12年度予算（案）

◇収入

	(円)
普通会員会費	300,000
前年度繰越金	551,303
日仏会館補助金	0
計	851,303

◇支出

	(円)	
印刷費	400,000	『通信』24,25分を含む
通信費	70,000	『通信』24,25分を含む
会議費	30,000	
消耗品費	7,000	
支払報酬費	20,000	
雑費	20,000	
旅費	50,000	
予備費	254,303	
計	851,303	

日佛東洋學會會員名簿

赤松 明彦
AKAMATSU Akihiko

秋山 光和
AKIYAMA Terukazu

蘆田 孝昭
ASHIDA Takaaki

シャリエ、イザベル
CHARRIER, Isabelle

竺沙 雅章
CHIKUSA Masaaki

デレヌ、フロリン
DELEANU Florin

デュケニス、ロベール
DUQUENNE, Robert

デュルト、ユベール
DURT, Hubert

江上 波夫
EGAMI Namio

遠藤 光暁
ENDO Mitsuaki

フィエヴ、ニコラ
FIEVE, Nicolas

福井 文雅
FUKUI Fumimasa

福島 仁
FUKUSHIMA Hitoshi

ギメ美術館
Guimet(Musee)

濱田 正美
HAMADA Masami

羽田 正
HANEDA Masashi

原 實
HARA Minoru

服部 正明
HATTORI Masaaki

日佛東洋學會會員名簿

平井 宥慶
HIRAI Yuhkei

平川 彰
HIRAKAWA Akira

廣川 堯敏
HIROKAWA Takatoshi

堀池 信夫
HORIIKE Nobuo

市古 貞次
ICHIKO Teiji

井狩 彌介
IKARI Yasuke

池田 温
IKEDA On

生田 滋
IKUTA Shigeru

石田 秀實
ISHIDA Hidemi

石田 憲司
ISHIDA Kenji

石上 善應
ISHIGAMI Zenno

石井 米雄
ISHII Yoneo

石澤 良昭
ISHIZAWA Yoshiaki

岩田 孝
IWATA Takashi

彌永 信美
IYANAGA Nobumi

彌永 昌吉
IYANAGA Shokichi

門田 眞知子
KADOTA Machiko

柿市 里子
KAKIICHI Satoko

日佛東洋學會會員名簿

金谷 治
KANAYA Osamu

神田 信夫
KANDA Nobuo

狩野 直禎
KANO Naosada

カ° ラン、 ヒ° エール
KAPLAN Pierre

加藤 純章
KATO Junsho

川合 康三
KAWAI Kozo

川本 邦衛
KAWAMOTO Kunie

川崎ミチコ
KAWASAKI Michiko

菊地 章太
KIKUCHI Noritaka

木津 祐子
KIZU Yuko

小林 正美
KOBAYASHI Masayoshi

小谷 幸雄
KOTANI Yukio

古藤 友子
KOTOH Tomoko

興膳 宏
KOZEN Hiroshi

栗原 圭介
KURIHARA Keisuke

楠山 春樹
KUSUYAMA Haruki

桑山 正進
KUWAYAMA Shoshin

京戸 慈光
KYODO Jiko

日佛東洋學會會員名簿

前田 繁樹
MAEDA Shigeki

丸山 宏
MARUYAMA Hiroshi

増尾伸一郎
MASUO Shin'ichiro

松原 秀一
MATSUBARA Hideichi

御牧 克己
MIMAKI Katsumi

三崎 良周
MISAKI Ryoshu

宮澤 正順
MIYAZAWA Masayori

森 由利亞
MORI Yuria

森賀 一惠
MORIGA Kazue

森安 孝夫
MORIYASU Takao

明神 洋
MYOJIN Hiroshi

中村 璋八
NAKAMURA Shohachi

中谷 英明
NAKATANI Hideaki

成瀬 隆純
NARUSE Takazumi

成瀬 良徳
NARUSE Yoshinori

小河 織衣
OGO Oriie

岡本 さえ
OKAMOTO Sae

岡本 天晴
OKAMOTO Tensei

日佛東洋學會會員名簿

丘山 新
OKAYAMA Hajime

岡山 隆
OKAYAMA Takashi

小名 康之
ONA Yasuyuki

大谷 暢順
OTANI Chojun

尾崎 正治
OZAKI Masaharu

定方 晟
SADAKATA Akira

齋藤 希史
SAITO Mareshi

坂出 祥伸
SAKADE Yoshinobu

酒井 忠夫
SAKAI Tadao

櫻井 清彦
SAKURAI Kiyohiko

澤 美香
SAWA Mika

白井 順
SHIRAI Jun

白杉 悦雄
SHIRASUGI Etsuo

白戸 わか
SHIRATO Waka

庄垣内正弘
SHOGAITO Masahiro

菅原 信海
SUGAHARA Shinkai

砂山 稔
SUNAYAMA Minoru

鈴木 董
SUZUKI Tadashi

日佛東洋學會會員名簿

高橋 稔
TAKAHASHI Minoru

高崎 直道
TAKASAKI Jikido

高田 時雄
TAKATA Tokio

武内 紹人
TAKEUCHI Tuguhito

田中 文雄
TANAKA Fumio

館野 正美
TATENNO Masami

徳永 宗雄
TOKUNAGA Muneo

瀧波 護
TONAMI Mamoru

虎尾 達哉
TORAO Tatsuya

坪井 善明
TSUBOI Yoshiharu

都留 春雄
TSURU Haruo

梅原 郁
UMEHARA Kaoru

ワッセルマン、ミシェル
WASSERMAN, Michel

渡會 顯
WATARAI Akira

八木 徹
YAGI Toru

山田 均
YAMADA Hitoshi

山田 利明
YAMADA Toshiaki

山本 澄子
YAMAMOTO Sumiko

日佛東洋學會會員名簿

山折 哲雄
YAMAORI Tetsuo

矢野 道雄
YANO Michio

吉田 敦彦
YOSHIDA Atsuhiko

吉田 敏行
YOSHIDA Toshiyuki

吉田 豊
YOSHIDA Yutaka

湯川 武
YUKAWA Takeshi

由木 義文
YUKI Yoshifumi

遊佐 昇
YUSA Noboru

湯山 明
YUYAMA Akira

編集後記

長らくお待ちせしました。『日仏東洋学会通信』をお届けします。24号・25号合併号となりました。大幅な延引を衷心よりお詫び申し上げます。

御牧克己氏の「チベット牧象図再考」、François Martin 氏の *Dix ans de développement des études sur la littérature chinoise en France (II)* という興味深い二つの講演録をめることができ、さらに岡本さえ氏からは「福建省の出版に見る東西文化交流」という原稿をいただきました。3氏に厚くお礼申し上げます。

2年前から年に2回開かれるようになった日仏関連学会連絡協議会は加盟する学会が26に増え、わが日仏東洋学会は第5番目に加入した古参学会となっています。同協議会における報告によれば、文部科学省からの日仏学者交換制度への補助金は、1997年の200万円から毎年20万円ずつ減額されており、本年度はついに140万円となって、先々継続が危ぶまれる状態になっているそうです。日本経済に歩調を合わせ、経済的には苦しい状態が続いているようですが、日仏会館自体の活動は、秋山光和学術委員会委員長、白井泰次日仏会館副理事長、小林善彦同常務理事をはじめとする日仏会館の方々の努力により、年々会員が増え、講演会、シンポジウムなども活発化しているようです。日仏東洋学会も最後に参加した日仏コロックから既に10年近くを経過し、そろそろ何かの貢献を考えることができまいかとも思われる昨今です。

Boursier の試験を受ける東洋学の学生がしばらく途絶えていますが、確認してみますと決して受からないわけではなさそうです。少なくとも試みる価値はあるように思われます。

渋沢クロード賞、日仏学者交換、日仏共同研究などの公募は例年通り行われていますので、詳細は事務局までお尋ねください。

通信編集にご尽力くださった齋藤希史氏、会計事務を担当いただいた森由利亞氏にお礼申し上げます。

平成13年2月21日

中谷英明

日仏東洋学会 **通信** 第24・25号

2001年3月21日

編集 日仏東洋学会

発行者 興膳 宏

発行所 〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518
神戸学院大学人文学部 中谷英明研究室

印刷所 六稜舎
〒530 大阪市北区浪花町9-12-402
TEL : 06-6371-1681